地球化学 45, 251-264 (2011) Chikyukagaku (Geochemistry) 45, 251-264 (2011)

総説

硫黄同位体から読み取る太古代地球の表層環境: 現状とその問題点

大竹 翼*,†・渡辺 由美子**

(2011年4月26日受付, 2011年8月26日受理)

Using multiple sulfur isotopes to understand the Earth's surface environments during the Archean era

Tsubasa Otake^{*} and Yumiko Watanabe^{**}

- * Department of Earth Science, Graduate School of Science, Tohoku University Aramaki 6-3 Aoba-ku, Sendai, Miyagi 980-8578, Japan
- [†] Present address; Institute for Geo-Resourses and Environment, National Institute of Advanced Industrial Science and Technology, 1-1-1 Higashi, Tsukuba, Ibaraki 305-8567, Japan
- ** The NASA Astrobiology Institute and Department of Geosciences, The Pennsylvania State University University Park, PA 16802, USA

Since the discovery of Anomalous Isotope Fractionation (AIF) of sulfur, or more commonly termed Mass-Independent Fractionation (MIF) of sulfur, in many sedimentary rocks older than 2.45 Ga, and its virtual absence in younger rocks, the AIF record has been cited by many researchers as unequivocal evidence for a dramatic change from an anoxic to oxic atmosphere around 2.45 Ga. However, multiple sulfur isotope data from these natural samples have been interpreted based on the assumption that sulfur chemistry in gas phase is only responsible for AIF of sulfur in nature. The objective of this review is to evaluate this assumption. First, results of ab initio calculations for equilibrium isotope exchange between S-bearing species show that deviations from the mass-dependent relationships during equilibrium processes are much smaller than those found in Archean sedimentary rocks. Consequently, AIF requires a property that is a discontinuous function of mass (e.g., nuclear volume, magnetic moment, asymmetry of molecules, isotopic abundance). The number of bound states may be another discontinuous function of mass, which fractionates S isotopes anomalously during chemisorption at a high temperature (e.g., $>100^{\circ}$ C). A recent experimental study also showed that thermochemical sulfate reduction by simple amino acids produces AIF of sulfur. These results suggest that an alternative process, such as reactions between organic matter in sediments and sulfate-rich hydrothermal solutions, may have caused AIF signatures of sulfur in Archean sedimentary rocks.

Key words: Sulfur isotope, Mass-dependent fractionation, Anomalous isotope fractionation, Evolution of atmosphere, Thermochemical sulfate reduction

** The NASA Astrobiology Institute and Department of Geosciences, The Pennsylvania State University University Park, PA 16802, USA

 ^{*} 東北大学大学院理学研究科地学専攻
 〒980-8578 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉6-3

 [・] 現住所:産業技術総合研究所地圏資源環境研究部門 〒305-8567 茨城県つくば市東1丁目1-1 中央第7

1. はじめに

アストロバイオロジーは、「生命がどのようにして 誕生し,進化し,そしてどこへ向かっていくのか」と いう疑問に答えるための学問である (e.g., Des Marais et al., 2008)。これらの疑問を考える上で重要 な問題に、地球の表層環境と生物活動の相互作用があ る。なぜなら、地球表層環境と生物進化は、互いに密 接に関連していると考えられているからである。地球 史の中で最も大きな地球表層環境の変化の一つは,酸 素発生型光合成生物の誕生による地球表層の酸化であ る。酸素発生による大気組成の変化(メタンに代表さ れる還元的なガス濃度の減少やオゾン層の形成など) や海水中の溶存成分の変化(硫酸イオン濃度の増加や 鉄イオン濃度の減少など)は、その後の生物進化にも 大きな影響を与えたと考えられている (e.g., Cloud, 1972; Runnegar, 1991; Knoll and Carroll, 1999; Anbar and Knoll, 2002) $_{\circ}$

酸素発生型光合成生物で最も早く進化したと考えら れているシアノバクテリアの出現時期と、それに伴う 海洋・大気の酸化時期について、これまで多くの議論 がなされてきた。約35億年前にはシアノバクテリア が出現していたということが、初生的な赤鉄鉱の沈殿 (Hoashi et al., 2009) により示唆されている。また, 30~27億年前には少なくとも地球表層の一部が酸化 的な環境になったこと (Kato et al., 2009; Kerrich and Said, 2011) も示唆されている。しかしながらそ の一方,現在,最も多くの研究者によって支持されて いるモデルは, 28~27億年前にシアノバクテリアが 進化し (Brocks et al., 1999),その後,徐々に海洋中 の溶存酸素濃度が上昇した後,25~24億年前に大気 中の酸素濃度が急激に上昇するイベント (Great Oxidation Event) が起こったというものである (e.g., Holland, 2002; Bekker et al., 2004)。そして,このモ デルの最も大きな根拠となっているのが,堆積岩に含 まれる含硫黄鉱物 (硫化鉱物や硫酸塩鉱物)の全ての 硫黄安定同位体 (³²S, ³³S, ³⁴S, ³⁶S) 比の変化である。

Farquhar et al. (2000a)は、様々な地質年代の堆 積岩に含まれる硫化鉱物および硫酸塩鉱物の全ての硫 黄安定同位体比を測定し、24億5000万年前よりも古 い堆積岩中にのみ、「特異」な硫黄同位体比をもつ鉱 物が含まれていることを発見した(Fig.1)。この「特 異性」については次章で詳しく述べるが、Bigeleisen and Mayer (1947)によって導かれた質量に依存す る同位体分別から大きく外れることから、非質量依存 性同位体分別(Mass-Independent Fractionation:



Fig. 1 Records of anomalous sulfur isotope signatures of sulfides and sulfates in sedimentary rocks older than 1500 Ma. The Δ³³S value is defined as Δ³³S = δ³³S - 0.515 × δ³⁴S (See main text and Fig. 3). The Δ³³S values outside of the grey zone (|Δ³³S| > 0.2‰) are considered as anomalous isotope signatures. The isotope data are from Farquhar *et al.* (2000a; 2007b), Mojzsis *et al.* (2003), Ono *et al.* (2003; 2006; 2009a; 2009b), Bekker *et al.* (2004; 2009), Papineau *et al.* (2005; 2007), Ohmoto *et al.* (2006a), Kamber and Whitehouse (2007), Kaufman *et al.* (2007), Philippot *et al.* (2007), Partridge *et al.* (2008), Ueno *et al.* (2008), Shen *et al.* (2009), Guo *et al.* (2009), and Thomazo *et al.* (2009).

MIF)と呼ばれている。また彼らは、無酸素下で SO₂ ガスに特定波長(e.g., 193 nm)の紫外線を照射し、 その分解生成物が特異な硫黄同位体比を持つことを実 験的に示した(Fig. 2; Farquhar *et al.*, 2001)。これ らのことより、太古代に見られる硫黄同位体比異常 は、遊離酸素に乏しくオゾン層の存在しない大気中 で、火山活動によって放出された SO₂ガスの光化学反 応によって起こったと考えた。酸素に乏しい大気下で は大陸地殻の酸化的な化学風化が起こらないため、現 在とは異なる硫黄の地球化学サイクルが太古代には起 きていたと考えたのである(Farquhar and Wing, 2003)。

Farquhar らの発表以後,このような硫黄同位体比 異常を示す堆積岩が24億年前以前には多く存在する (一方でこの年代の堆積岩中の含硫黄鉱物が必ずしも 同位体比異常を示すものではない)ことが,様々な研 究者によって確認された(Fig. 1; Mojzsis *et al.*, 2003;



Fig. 2 The δ^{34} S and Δ^{33} S values of sulfide minerals in sedimentary rocks older than 1500 Ma. The data sources and definition of Δ^{33} S value are the same as Fig. 1. The "Hamersley" trend is a trend with a slope of ~ 1 in the diagram. The trend is typically observed in sedimentary rocks in the Hamersley Basin, Australia of 2.7~2.5 Ga (e.g., Ono *et al.*, 2003), and the equivalent-aged rocks in the Kaapvaal Craton, South Africa (e.g., Ono *et al.*, 2009b). Trends of the values in photolysis experiments with 193 nm UV (Farquhar *et al.*, 2001) and broadband UV (Masterson *et al.*, 2011) are also shown in the diagram.

Ono et al., 2003; Bekker et al., 2004; Ohmoto et al., 2006a; Ono et al., 2006; Farquhar et al., 2007b; Kamber and Whitehouse, 2007; Kaufman et al., 2007; Papineau et al., 2007; Philippot et al., 2007; Partridge et al., 2008; Ueno et al., 2008; Bekker et al., 2009; Guo et al., 2009; Ono et al., 2009a; Ono et al., 2009b; Shen et al., 2009; Thomazo et al., 2009). また, Pavlov and Kasting (2002) は、大気中にお ける光化学反応のモデル計算によって、光化学反応に よる同位体比異常が堆積物中に硫化鉱物として取り込 まれるためには、大気中の酸素濃度が現在の10万分 の1以下である必要があると結論付けた。同様の計算 によって、メタンや硫化カルボニル (OCS) 濃度な どの大気組成の変化 (Domagal-Goldman et al., 2008; Ueno et al., 2008) や生物活動の変化 (Halevy et al., 2010)から、太古代における同位体比異常の時系変 化の傾向(Fig. 1)を説明しようとする研究も行われ ている。

このような太古代における硫黄のサイクルや大気組 成についての進化モデルは、多くの研究者によって支 持されている(e.g., Kasting, 2001; Canfield, 2005; Kump, 2008)が、このモデルは「SO₂の光化学反応 が地球表層環境における硫黄の同位体比異常を示す唯 一の同位体分別プロセスである」という仮定のもとに 成り立っている。ところが、光化学反応における硫黄 同位体の分別メカニズムは、未だによく理解されてい ない部分が多い(Lyons, 2009)。また、光化学反応実 験における生成物の硫黄同位体比異常の特徴は、太 古代堆積岩中に見られるものとは大きく異なる (Fig. 2)。さらに近年、Watanabe *et al.* (2009)は、 硫酸イオンと有機分子との反応によって、堆積物中で も特異な同位体分別が起こり得ることを実験的に明ら かにした。

このようなことから,硫黄の安定同位体は,初期地 球の大気進化および生命進化を解明する上で非常に重 要なツールであると考えられるが,多くの未解決の問 題がある。この総説の目的は,(1)硫黄同位体分別 の質量依存性と特異な同位体分別のメカニズム,およ び(2)これまでの解釈における問題点を検証するこ とである。また,これらの硫黄同位体を用いた地球化 学的研究がアストロバイオロジーという学問にさらに 貢献していくために,今後の研究の方向性を提案す る。

2. 質量依存性同位体分別 (Mass-Dependent Fractionation: MDF) と特異な同位体 分別 (Anomalous Isotope Fractionation: AIF)

天然試料や実験生成物中の安定同位体比を議論する 際には、標準物質の同位体比からの相対的な差を、千 分率(‰)で表すデルタ(δ)を用いるのが一般的で ある。例えば、硫黄の安定同位体では、隕石中の硫化 鉱物(CDT: Canyon Diablo Troilite),あるいは IAEA(International Atomic Energy Agency)標準 試料(V-CDT: Vienna CDT)を標準物質として用い て:

$$\delta^{34}\mathbf{S} = \left[\left({}^{34}\mathbf{S}/{}^{32}\mathbf{S} \right)_i / \left({}^{34}\mathbf{S}/{}^{32}\mathbf{S} \right)_{(V^-)CDT} - \mathbf{1} \right] \times 1000 \quad (\%)$$
(1)

と表す。同様に、³³S/²³S や³⁶S/²³S 比を、 δ^{33} S や δ^{36} S 値で表す。ここで、(³⁴S/²³S)_iとは、化合物 i中の³⁴S と³²S の存在比である。また、化合物 A と化合物 B の 同位体交換反応が平衡に達しているときの同位体分別 係数(α_{A-B})は、

$${}^{34}\alpha_{A-B} = ({}^{34}S/{}^{32}S)_{A}/({}^{34}S/{}^{32}S)_{B}$$
$$= (\delta^{34}S_{A} + 1000)/(\delta^{34}S_{B} + 1000)$$
(2)

と表すことができる。また, α_{A-B} 値が1に十分近い値 である時, 以下の近似式を用いることができる:

$$1000 \times (\alpha_{A-B} - 1) \approx 1000 \times \ln(\alpha_{A-B})$$
$$\approx \delta^{34} S_A - \delta^{34} S_B$$
(3)

³³α_{A-B}, ³⁶α_{A-B} についても同様に表すことができる。

Bigeleisen and Mayer (1947) は,同位体分別係 数について高温条件 (e.g., 500°C) では以下の近似式 が成り立つことを示した (式の導出を Appendix に示 す):

$$\alpha_{A-B} \cong 1 + (C_A - C_B) \frac{m' - m}{mm'}$$
(4)

ここで, m, m'はある元素とその同位体の質量, C_A, C_B は質量に関係しない定数である。(4)式は, 同位 体分別の程度は, その元素の質量の2乗に反比例し, また,比較する同位体の質量差に比例するということ を意味している。したがって一般に, 軽い元素ほど同 位体分別の程度は大きく, また, 硫黄のように3つ以 上の安定同位体を持つ元素に関しては, 以下の関係式 が成り立つ:

(3), (5), および(6) 式より,

$$\delta^{33}\mathbf{S}_{\mathrm{A}} - \delta^{33}\mathbf{S}_{\mathrm{B}} \cong \mathbf{0.515} \times (\delta^{34}\mathbf{S}_{\mathrm{A}} - \delta^{34}\mathbf{S}_{\mathrm{B}}) \tag{7}$$

$$\delta^{36}\mathbf{S}_{\mathrm{A}} - \delta^{36}\mathbf{S}_{\mathrm{B}} \cong \mathbf{1.89} \times (\delta^{34}\mathbf{S}_{\mathrm{A}} - \delta^{34}\mathbf{S}_{\mathrm{B}}) \tag{8}$$

が得られる。このように、3つ以上の同元素の安定同 位体比を測定し、(7)、(8) 式の様な関係性が得られ る時、質量依存性の同位体分別(Mass-Dependent Fractionation: MDF)が起きているという。また、 δ^{34} S- δ^{38} S、 δ^{34} S- δ^{36} S ダイアグラムで得られるこのよ うな直線を Terrestrial Fractionation Line (TFL) あ るいは Mass-Dependent Fractionation Line (MDL) と呼ぶ(Fig. 3)。同位体分別が平衡に達しているい ないに関わらず、一般的な無機化学反応や生物を介し



Fig. 3 The terrestrial fractionation line (TFL) or Mass-dependent fractionation line (MDL) plotted on the δ^{34} S- δ^{33} S diagram, which follows the mass-dependent relationship. The TFL line has a slope of 0.515. The Δ^{33} S value of a sample is defined as a deviation from the expected value by the mass-dependent relationship. The ${}^{33}\theta'_{A-B}$ value is defined as $(\delta^{33}S_{A}-\delta^{33}S_{B})/(\delta^{34}S_{A}-\delta^{34}S_{B})$. In the diagram, the Δ^{33} S value for compound B is assumed to be 0.

た化学反応においては質量依存性の同位体分別を起こ すと考えられている。ただし, Farquhar et al. (2003; 2007a)や Johnston et al. (2005a; 2005b)は,生物 を介した反応ではミキシングの効果によって質量依存 性にわずかな差があり,これらを測定することによっ て硫黄化合物が生成される反応過程を特定できるとし ている。

Otake *et al.* (2008) では、様々な硫黄化合物中の 平衡時における全ての硫黄安定同位体の分別効果につ いて第一原理計算を行い、どのような質量依存性が得 られるかを検証した。計算に使用する理論精度の妥当 性は、得られた硫黄化合物の振動周波数や同位体分別 係数を実験値と比較することによって検討した。その 結果、振動周波数に経験値であるスケーリングファク ターを用いることにより、Hartree-Fock 法程度の比 較的低レベルでの計算でも実験結果と良い一致を示 した。例えば $a_{30,e^+(\omega)}^{30}$ -Has/値は、Ohmoto and Lasaga (1982) の200~400°C の範囲で得られた実験値と計 算値との差は0.5‰以内であった。これらの計算方法 で³³ α_{A-B} , ³⁴ α_{A-B} , および³⁶ α_{A-B} 値の全てを0~650°C の範囲で計算したところ、以下の結果が得られた (Fig. 4):

- 第一原理計算によって得られた³³ θ'および³⁸ θ'値
 は、高温領域では Bigeleisen and Mayer (1947)
 による近似式から予想される値(³³ θ'値で0.515, ³⁶ θ'値で1.89) に近いが、低温ほどその相違が大 きくなる(³³ θ'値で0.505~0.517,³⁶ θ'値で1.88~ 1.96)。
- (2) 低温領域における計算値とBigeleisen and

Mayer (1947) による近似式から予想される値と の差は,硫黄化合物の種類によって異なる。特に, $SO_4^{2-}(aq)$ と $H_2S_{(aq)}$ のような酸化数の大きく異なる組 み合わせ (Fig. 4の実線5) において,その相違が 顕著となる。

これらの結果は、平衡時の同位体分別であっても、 正確には(4)式に従わない場合があることを示して いる。これは、式(4)の導出で用いられているU= hv/kTが十分に小さい値であるという仮定の妥当性と 関係している(Appendix参照)。ここで、hはプラン ク定数、vは振動周波数(s⁻¹)、kはボルツマン定数、 Tは温度(K)である。Bigeleisen and Mayer (1947) は、Uの値が3以下でこのような仮定が妥当であるこ とを示している。Uは振動周波数と温度によって求 まる値であるため、vが1000 cm⁻¹以上の振動モード が支配的な分子においては、Uが3以下になるために はTが500°C以上である必要がある。

しかしながら,上記のような同位体平衡時に見られ る Bigeleisen and Mayer (1947) による近似式から の"ずれ"は,太古代に見られる硫黄の同位体比異常 と比較すると非常に小さい。Young et al. (2002) や Lasaga et al. (2008)は,平衡時の同位体効果,動的 同位体効果に関わらず,分子振動,拡散,蒸発・凝縮 など,同位体分別が質量の連続的な関数である限り, このような質量依存性 (e.g.,³³ θ' = 0.48 – 0.53, ³⁵ θ' = 1.8 – 2.1)が見られることを示している。

以上のことから,特異な同位体分別が起きるために は,質量に関して不連続性をもった特性が必要である ことがわかる。同位体比異常の程度は,測定値と質量



Fig. 4 Ratios of fractionation factors $(a:^{33}\theta' = (\alpha^{33} - 1)/(\alpha^{34} - 1); b:^{36}\theta' = (\alpha^{36} - 1)/(\alpha^{34} - 1))$ between various sulfur-bearing species couples as a function of temperature (0 to 650°C), which were calculated using ab initio methods by Otake *et al.* (2008).

依存則から期待される値との差を∆値として表す(Fig. 3):

 $\Delta^{33}\mathbf{S} \equiv \delta^{33}\mathbf{S} - 0.515 \times \delta^{34}\mathbf{S} \tag{9}$

$$\Delta^{36}\mathbf{S} \equiv \delta^{36}\mathbf{S} - 1.89 \times \delta^{34}\mathbf{S} \tag{10}$$

Otake *et al.* (2008)の計算結果による平衡同位体交 換時に起こりうる Δ 値の範囲は、おおよそ Δ ³³Sで± 0.2‰, Δ ³⁶Sで±0.4‰であり、これらの範囲を超える Δ 値が得られた時に特異な同位体分別(Anomalous Isotope Fractionation: AIF)が起きていると呼ぶ。 このような同位体分別は、これまで多くの研究者に よって非質量依存性同位体分別(Mass-Independent Fractionation: MIF or Non-Mass-Dependent Fractionation: NMDF)と呼ばれてきた。しかしながら、 太古代の硫黄同位体比異常については具体的な分別メ カニズムが明らかになっていないことや、連続的、不 連続的の違いはあっても全ての同位体分別は質量に依 存していることから、単純に現象に対しての呼称であ る AIF と呼ぶべきである(Lasaga *et al.*, 2008)。

3. AIF メカニズムの理論的・実験的研究

質量に関して不連続性をもち AIF を起こす特性の 例として,核の大きさ,核磁気モーメントの有無,分 子の非対称性,同位体の存在度,振動準位の数などが 挙げられる。これまでに,AIF の素過程,分別メカ ニズムを明らかにするための様々な実験的・理論的研 究が行われている。

核の大きさは、同じ元素であっても、必ずしも質量 数の増加に伴い連続的に大きくなるわけではない (e.g., Fujii et al., 2009)。通常, 核一電子の相互作 用,分子振動などにおいて,核は電子に比べて無限に 重いと考えられるため不動の点として扱う(ボルン・ オッペンハイマー近似)。ところが、ウランのような 質量数の大きい元素に関しては、核の大きさの違いに よる同位体効果(nuclear field shift effect)が起きる ことが、質量依存則を導いた Bigeleisen 自身によっ て提案された (Bigeleisen, 1996)。また、ストロンチ ウム (Nishizawa et al., 1995) やクロム (Fujii et al., 2008)などの質量数が中程度の元素でも、このよう な同位体効果が重要であり、AIF を起こすことが実 験的に確かめられてきている。しかしながら、硫黄に 関しては,核の大きさの違いによる同位体効果は,理 論的には非常に小さい(δ³⁴Sで0.05‰以下)と考え

られている (Schauble, 2007)。

炭素や酸素などの質量数の小さい元素では、核磁気 モーメントの有無による同位体効果(magnetic isotope effect)が顕著に現れることがある (e.g., Buchachenko, 1995)。この同位体効果は光化学反応 などのラジカル反応を伴う場合に起こるが、このよう なメカニズムでは、核磁気モーメントの異なる³²S-³³S -³⁴S間ではAIFを起こしても、全て核磁気モーメン トを持たない³²S-³⁶S-³⁴S間では起こらない。また、オ ゾン (O₃)のような分子に関しては、対称分子 (e.g., ¹⁶O¹⁶O¹⁶O) と非対称分子 (e.g., ¹⁷O¹⁶O¹⁶O) で、その 生成速度に差があることが知られている (Gao and arcus, 2001; Janssen *et al.*, 2001)。

光化学反応における AIF には、同位体の存在度に よって同位体分別が起こる自遮蔽効果 (self-shielding effect) も考えられる (e.g., Thiemens and Heidenreich, 1983; Clayton, 2002)。隕石中の鉱物(Clayton et al., 1973) や成層圏のオゾン (Mauersberger, 1981) の 酸素は、特異な同位体比を持つことが早くから 知られていた(酸素のAIFに関する最近の総説 は Chakraborty and Bhattacharya (2003b) や Thiemens (2006) がある) が, これらのAIF につ いては、自遮蔽効果による同位体分別メカニズムが現 在最も支持されている。CO 分子などの光解離によっ て吸収される紫外線の波長は、同位体によって微妙に 異なる。そのため、星雲内部やオゾン層などでは、同 位体の存在度によってその同位体の吸収する特定波長 の強度に差が現れる。その結果、紫外線吸収帯の光源 より遠方側では、存在度の高い同位体ほど分別を起こ しにくくなり、AIF を起こすと考えられている。

また,Lasaga et al. (2008)は、気体もしくは溶存 状態の硫黄化合物と固体表面との化学吸着反応によっ てもAIFが起き得ると提案している。化学吸着反応 においてAIFが起きるための条件は、(1)吸着エネ ルギーがあまり高くないこと(e.g., <30 kJ/mol), (2)高温であること(e.g., >100°C),(3)固体表面 の原子と硫黄化合物中の硫黄原子間の結合について、 束縛状態における振動準位の数が同位体によって異な ること(Fig. 5)である。この中で、(3)の条件は、 質量に関して不連続性をもった特性を吸着反応に与え ており、最も重要である。また、(3)の条件は、吸 着エネルギーや結合のバネ定数などの違いによって、 特定の表面反応のみに見られる(Lasaga et al., 2008 中のFig. 3を参照)。Lasaga et al. (2008)では、第



Fig. 5 A Morse potential curve, showing bound energy levels for ³²S, ³³S, ³⁴S, and ³⁶S atoms that are chemisorbed onto a surface oxygen atom with a chemisorption energy, $D_e = 0.3 \text{ eV}$ (=29 kJ/mol) and a chemisorption force constant, $k_e = 4.9 \text{ mdyn/Å}$ ($v_{\text{harmonie}} = \sim 880 \text{ cm}^{-1}$) (Lasaga *et al.*, 2008). The horizontal axis is expressed as $r \cdot r_{eq}$ (Å), the difference from the equilibrium bonding length of S-O. Note that the bound energy level at n = 5 for ³²S is missing. The discontinuous behavior of the number of bound states for different sulfur masses could lead to AIF during the adsorption of a sulfur compound onto a solid surface.

一原理計算などを行い,酸化物や固体有機物の表面と
硫黄化合物との相互作用により AIF が起き得ることを示している。また、メカニズムは異なるが、
Chakraborty and Bhattacharya (2003a) や Marcus (2004) なども、固体表面上での分子の解離反応によって酸素の AIF が起きると提案している。

その後, Balan et al. (2009)は, Lasaga et al. (2008)による化学吸着に伴う同位体効果の計算に は,東縛状態だけでなく非束縛状態の振動準位も含め て計算を行う必要があると主張した。そのような計算 を行った場合には同位体によって振動準位の数に違い がないため,AIFは期待できない。しかしながら, 束縛状態と非束縛状態は本質的に異なる状態を意味し ており,吸着反応における同位体効果の計算において 非束縛状態を含めることはできない(Lasaga et al. 未 公表資料, Anomalous fractionation of sulfur isotopes: a review, in prep.)。ただし, Lasaga et al. (2008)は表面反応によって硫黄のAIFが起こる可 能性を理論的に示したものであり、今後、実験による 検証が必要である。

4. 光化学反応による硫黄の AIF

Farquhar *et al.* (2000b; 2001) や Masterson *et al.* (2011) は,数種類の紫外領域波長のレーザー照射 によって SO₂ガスの光解離反応実験を行った。SO₂の 光解離は以下のようなステップで起こると考えられ る:

$$SO_2 \longrightarrow SO + O$$
 (11)

$$SO \longrightarrow S+O$$
 (12)

実験の結果,ArFエキシマレーザー(193 nm)を用 いた時に大きなAIF が起きることが明らかになった (生成物である S⁰で δ^{34} S値が40‰から90‰, Δ^{33} S値 が+60‰から+70‰;Fig. 2)。その一方で,より自然 光に近い連続波長を照射するためにXe(>220 nm) や²H ランプ(180~360 nm)を光源として用いたと ころ, MDF としては大きな分別が見られたが,同位 体比異常は比較的小さかった(²H ランプで δ^{34} S 値が+127‰から+179‰, Δ^{33} S 値が0‰から+15‰; Fig. 2)。

なぜ特定波長の紫外線照射によって硫黄の同位体比 異常が起きるのか,現在のところ,物理化学的な説明 を得られていない。SO₂や SO 分子の光解離が,オゾ ン分子のように非対称性を原因として AIF を起こす ことは考えにくい。また, Δ^{36} S でも同位体比異常が 見られることから,磁気モーメントの有無に起因する AIF とは考えられない。さらに,これらの紫外線照 射実験による同位体分別の傾向(Δ^{33} S/ δ^{34} S 比)を, 太古代の堆積物中に見られる同位体比異常の傾向や値 の大きさと比較すると, Δ^{33} S 値, δ^{34} S 値ともに大き く異なる(Fig. 2)。したがって,これらの SO₂ガス の紫外線照射実験の結果だけでは,太古代の堆積岩中 に見られる硫黄の同位体比異常を説明することは難し い。

このようなことから、太古代の堆積岩中に見られる 硫黄の同位体比異常を、太古代大気中での SO₂の自遮 蔽効果によって説明しようとする試みが行われてい る。しかし、現段階ではモデリングによる推定がほと んどであり(Lyons, 2007; 2009; Ueno *et al.*, 2009), 実験的研究(Pen and Clayton, 2008)は限られてい る。自遮蔽効果による硫黄の AIF をより正確に推定 するためには、(1)紫外領域における SO₂の吸収スペ クトル、(2) SO₂吸収スペクトルの同位体によるシフ ト、および(3)他のガスによる紫外線吸収の効果、 を正確に見積もることが必要となる。

(1), (2) については、以前は Freeman *et al.*(1984) や Wu *et al.* (2000) による全ての同位体を 含む SO₂の吸収スペクトルの測定のみであったが、太 古代堆積岩中の硫黄同位体比異常の発見後は、 Danielache *et al.* (2008) や Poulson *et al.* (2008) によって同位体ごと(³³SO₂や³⁴SO₂)の吸収スペクト ルの測定も行われている。また、Ran *et al.* (2007) による理論計算の結果(³²SO₂, ³³SO₂, ³⁴SO₂, ³⁴SO₂) もある。しかしながら、これまで得られた吸収スペク トルは、自遮蔽効果に伴う同位体比異常の程度や傾向 を正確に予測できる精度があるのかという疑問がある (Lyong 2000) また、同位体による吸収スペクトル

(Lyons, 2009)。また,同位体による吸収スペクトル のシフトは,SO₂中の酸素同位体によるシフトについ ても,硫黄同位体と同様に考慮する必要性も指摘され

ている (Naraoka and Poulson, 2009)。 (3) につい ては、Lyons (2007) が、太古代において重要な温暖 化ガスの一つとして考えられている CO2の影響を考 慮し, CO₂濃度が AIF の大きさに影響を与えること を示した。また, Ueno et al. (2009) は, CO₂, H₂O, NH₃, CS₂, OCS などの様々なガス成分による紫外線 の吸収効果を考慮し,太古代に見られる同位体比異常 の傾向 (Fig. 2) を説明するためには、CO (~1%) やOCS(~5ppm)に富んだ大気が必要であると結 論付けた。この結果は、太古代の大気がこれまで考え られている CO₂に富んだ大気 (e.g., Kasting, 1993) よりもさらに還元的であり、また CO₂の他にも OCS のような温暖化ガスを含んでいた可能性を示してい る。このような研究結果は、硫黄の安定同位体が太古 代地球の表層環境の変遷を知る上で重要な情報をもた らす可能性を示している。しかしながら、(1)、(2) の問題を解決した上でなければ有用な情報をもたらす ことはできない。また、モデリングによる推定だけで なく、想定される大気組成の混合気体を用いて、自遮 蔽効果による AIF を実験的に検証することなども今 後必要である。

5. 無機的硫酸還元反応(Thermochemical Sulfate Reduction: TSR)による AIF

第4章では、光化学反応によって太古代堆積岩中に 見られる硫黄の同位体比異常を説明するモデルを検討 してきた。しかしながら、太古代堆積岩中の硫黄同位 体比異常には、その岩石の地質学的・地球化学的特徴 と良い相関を示すものがある。そのような相関関係は 光化学反応によるモデルでは説明することが難しい。 したがって、「SO₂の光化学反応が地球表層環境にお ける硫黄の同位体比異常を示す唯一の同位体分別プロ セスである」という仮定の妥当性について再検討する 必要がある。

例えば、Ono *et al.* (2003) は西オーストラリアの Hamersley 地域に見られる27~25億年前に堆積した Mt. McRae 層と Jeerinah 層という黒色頁岩中の黄鉄 鉱の硫黄同位体比を測定し、-2%から+7‰の Δ^{33} S 値 を 得 た。そ の 後、Kaufman *et al.* (2007) や Partridge *et al.* (2008) による分析の結果、これら の地層には+10‰程度までの Δ^{33} S 値を持つことが報 告された。これらの値は、地球史の中で見られる最も 大きな硫黄同位体比異常である (Fig. 1)。また、こ れらの同位体比異常は、南アフリカ Kaapvaal 地塊で 見られる同年代の堆積岩(e.g., Ono *et al.*, 2009b)と ともに、 δ^{34} S- Δ^{33} S ダイアグラムにおいて傾きがほぼ1 の特徴的な傾向を示す(Fig. 6)。Ohmoto *et al.* (2006b)は、Ono *et al.*(2003)が硫黄同位体比を 測定したものと同一のサンプルを用いて化学組成を分 析し、熱水変質の度合いを示す K/Rb 比や Zn 含有量 と Δ^{33} S 値が相関関係にあることを見出した。これら の地層の直上には、鉄に富んだ化学堆積物、縞状鉄鉱 層が堆積しており、これらの鉄は海底熱水活動によっ てもたらされたと考えられる。したがって、Mt. McRae 層と Jeerinah 層が縞状鉄鉱層の堆積に伴って



Fig. 6 Comparisons of Δ^{33} S and δ^{34} S values produced during TSR experiments bv Watanabe et al. (2009) with the "Hamersley" trend, as well as those predicted by the chemisorption model in Lasaga et al. (2008). In the TSR experiments, the δ^{34} S value of the initial sulfate was assumed to be 5%. In Lasaga et al. (2008), the fractionation factors for each model were calculated in a temperature range of 275-475 K. The results showed that the anomalous isotope signatures (i.e., $|\Delta^{33}S|$ values) are larger at higher temperatures. Data for natural samples are from sedimentary rocks in the Hamersley Basin, Australia (Ono et al., 2003; Kaufman et al., 2007; Partridge et al., 2008) and the equivalent-aged rocks in the Kaapvaal Craton, South Africa (Ono et al., 2009a; Ono et al., 2009b).

熱水変質を受けたことは十分に考えられる。さらに, これらの同位体比異常を示す堆積岩のもう一つの特徴 は,有機炭素含有量が最大で15 wt%と非常に高いこ とである(Kaufman *et al.*, 2007)。

以上の特徴から,Watanabe *et al.* (2009) は,硫 黄化合物が有機化合物とともに堆積物中で熱水変質を 受けることによって,硫黄の同位体比異常が起こるの ではないかという仮説を立てた。地球表層環境におい て,硫酸イオン (SO₄⁻) から硫化水素 (H₂S) への 還元反応は,生物によって起きるもの (Bacterial Sulfate Reduction: BSR) と熱水環境下で無機的に起き るもの (Thermochemical Sulfate Reduction: TSR) の,2つの反応経路に大別できる。いずれの反応にお いても,有機物を還元剤とすると以下の式で表すこと ができる:

$$2(C-C^*) + SO_4^{2-} + 2H^+ \rightarrow 2CO_2 + 2C^* + H_2S$$
(13)

ここで、CおよびC*は、それぞれ有機物中の反応し やすい炭素と反応しにくい炭素を表している。現在の 海洋堆積物中ではBSR が卓越しているが、Watanabe et al. (2009)は熱水の影響が見られる Mt. McRae 層 とJeerinah 層の堆積時、もしくは初期続成作用時に TSR が支配的に起きていたのではないかと考え、反 応性が高い有機物であるアミノ酸を用いてTSR にお ける硫黄の同位体分別効果について実験を行った。

その結果, 150°C から200°C で硫酸から還元生成さ れた硫化水素において,最大で+2.1‰の△³³S 値を得 た (Fig. 6)。また、 Δ^{36} S 値においても – 1.1から + 1.1 ‰の同位体比異常が得られた。さらに、アミノ酸の種 類によって還元速度や同位体効果が異なること、グリ シンなどの単純なアミノ酸を用いた時に, AIF が起 こることを明らかにした。これらの実験結果は、光化 学反応以外にも硫黄の AIF を引き起こす反応過程が 存在するということを示している。また, TSR 実験 で得られた生成物の硫黄同位体比異常(Δ³³S-Δ³⁶S) の関係性や、同位体比異常の程度がより高温で大きく なることは、Lasaga et al. (2008) による表面反応に おける同位体効果の計算結果と整合的である。した がって、Watanabe et al. (2009) は、TSR 時の AIF は固体有機物表面と硫黄化合物による相互作用によっ て起きたと解釈し、太古代堆積岩中で見られる硫黄同 位体比異常に関しても, TSR によって説明できるも のがあると考えた。実際、太古代堆積岩中で見られる

 δ^{34} S 値と Δ^{33} S 値の約60%は、TSR による同位体効果 によって得られた値の範囲内である。

しかしながら、有機物による TSR の詳細な反応過 程やメカニズムは明らかになっておらず,具体的にど のような相互作用によって AIF が起こったのかは分 かっていない。また、TSR によって得られた同位体 比異常(Δ³³S値で最大+2.1‰)は、太古代堆積岩に 見られるもの(最大で+10%程度)と比較して小さ いという指摘もある (Hofmann et al., 2009; Sessions et al., 2009)。これは同位体比異常をもつ硫黄化合物 がリサイクルされ、何度も TSR を起こすことによっ て説明可能であるが、今後さらなる実験的な検証が必 要である。また、Ohmoto et al. (2006a) や Watanabe et al. (2009) は、太古代以降の堆積岩には同位体比 異常が見られない(Fig. 1)理由として,反応性に富 んだ有機物や鉱物、大規模な熱水活動の欠如を挙げて いるが、堆積物中での AIF にはどのような有機物や 鉱物が必要であり、それらがなぜ太古代のみに見られ るのか明らかになっていない。今後、有機物の反応性 についての研究や TSR 時の反応過程の解明によっ て、太古代の海洋環境や生物活動について新しい見地 を得ることが期待できる。

6. 結論とこれからの研究課題

これまでの実験的研究によって,(1) SO₂ガスの光 解離反応,(2) 硫酸イオンの無機的還元反応が硫黄 の同位体比異常を起こすことが明らかになった。しか しながら,それぞれの反応によって太古代の堆積岩中 に見られる硫黄の同位体比異常を説明するには,以下 の問題点がある:

- (1) SO₂の光解離反応については,
 - ・同位体比異常を起こす物理化学的なメカニズムが 明らかになっていない
 - ・紫外線照射実験によって得られた同位体比異常と 太古代堆積岩中で見られる同位体比異常ではその 傾向が一致しない
 - ・太古代堆積岩中で見られる同位体比異常と他の地 質学的および地球化学的データとの関連性を説明 することが難しい
- SO²⁻の無機的還元反応では、
 - ・硫黄化合物と有機物の反応過程およびメカニズム が明らかになっていない
 - ・実験で得られた特異な同位体効果は、太古代堆積 岩中で見られる最も大きな同位体比異常値よりも

小さい

・なぜ太古代のみに同位体比異常が見られるのかを 説明することが難しい

したがって, 現時点では, どちらの反応が太古代堆 積岩における同位体比異常の原因かを特定することは できない。これらの問題点を解決するためには,太古 代堆積岩試料の地質学的・地球化学的特徴の理解,室 内実験による反応過程の実証,特異な同位体効果を起 こす物理化学メカニズムの解明,など様々な地球化学 的手法を用いた包括的な研究が必要である。このよう なアプローチによって,太古代の硫黄同位体比異常 は,当時の地球表層環境と生物活動の相互作用(大気 組成や当時の有機物の堆積など)を理解するための有 用な情報を提供することができる。

謝 辞

本総説を執筆する機会を与えて頂いた薮田ひかる博 士に感謝する。本総説を執筆するにあたり,大本洋博 士とAntonio Lasaga博士とは多くの議論を行った。 奈良郁子博士,石田章純氏には,草稿を読んで頂き助 言を頂いた。また,小野周平博士,橋爪光博士には, 査読者として有用な助言を頂いた。本研究の一部は, 東北大学グローバル COE プログラム「変動地球惑星 学の統合教育研究拠点」,科学研究費補助金(大竹: 22740342), National Science Foundation grant (Watanabe: EAR-1024550)の支援を受けた。

引用文献

- Anbar, A. D. and Knoll, A. H. (2002) Proterozoic ocean chemistry and evolution: a bioinorganic bridge? Science, 297, 1137–1142.
- Balan, E., Cartigny, P., Blanchard, M., Cabaret, D., Lazzeri, M. and Mauri, F. (2009) Theoretical investigation of the anomalous equilibrium fractionation of multiple sulfur isotopes during adsorption. *Earth and Planetary Science Letters*, 284, 88–93.
- Bekker, A., Holland, H. D., Wang, P. -L., Rumble, D. III., Stein, H. J., Hannah, J. L., Coetzee, L. L. and Beukes, N. J. (2004) Dating the rise of atmospheric oxygen. *Nature*, 427, 117–120.
- Bekker, A., Barley, M. E., Fiorentini, M. L., Rouxel, O. J., Rumble, D. and Beresford, S. W. (2009) Atmospheric sulfur in Archean komatiite-hosted nickel deposits. *Science*, **326**, 1086–1089.
- Bigeleisen, J. and Mayer, M. G. (1947) Calculation of equilibrium constants for isotopic exchange reactions. Journal of Chemical Physics, 15, 261–267.
- Bigeleisen, J. (1996) Nuclear size and shape effects in chemi-

cal reactions. Isotope chemistry of the heavy elements. Journal of the American Chemical Society, **118**, 3676–3680.

- Brocks, J. J., Logan, G. A., Buick, R. and Summons, R. E. (1999) Archean molecular fossils and the early rise of eukaryotes. *Science*, 285, 1033–1036.
- Buchachenko, A. L. (1995) MIE versus CIE: comparative analysis of magnetic and classical isotope effects. *Chemi*cal Reviews, 95, 2507–2528.
- Canfield, D. E. (2005) The early history of atmospheric oxygen: homage to Robert M. Garrels. Annual Review of Earth and Planetary Sciences, 33, 1–36.
- Chakraborty, S. and Bhattacharya, S. K. (2003a) Oxygen isotopic anomaly in surface induced ozone dissociation. *Chemical Physics Letters*, **369**, 662–667.
- Chakraborty, S. and Bhattacharya, S. K. (2003b) Massindependent isotopic fractionation:recent developments. *Current Science*, 84, 766–774.
- Clayton, R. N., Grossman, L. and Mayeda, T. K. (1973) A component of primitive nuclear composition in carbonaceous meteorites. *Science*, 182, 485–488.
- Clayton, R. N. (2002) Solar system: self-shielding in the solar nebula. *Nature*, **415**, 860–861.
- Cloud, P. (1972) A working model of the primitive Earth. American Journal of Science, **272**, 537–548.
- Danielache, S. O., Eskebjerg, C., Johnson, M. S., Ueno, Y. and Yoshida, N. (2008) High-precision spectroscopy of ³²S, ³³S, and ³⁴S sulfur dioxide: Ultraviolet absorption cross sections and isotope effects. *Journal of Geophysical Research*, **113**, D17314.
- Des Marais, D. J., Nuth, J. A. III., Allamandola, L. J., Boss, A. P., Farmer, J. D., Hoehler, T. M., Jakosky, B. M., Meadows, V. S., Pohorille, A., Runnegar, B. and Spormann, A. M. (2008) The NASA Astrobiology Roadmap. Astrobiology, 8, 715–730.
- Domagal-Goldman, S. D., Kasting, J. F., Johnston, D. T. and Farquhar, J. (2008) Organic haze, glaciations and multiple sulfur isotopes in the Mid-Archean Era. *Earth and Planetary Science Letters*, **269**, 29–40.
- Farquhar, J. and Wing, B. A. (2003) Multiple sulfur isotopes and the evolution of the atmosphere. *Earth and Planetary Science Letters*, **213**, 1–13.
- Farquhar, J., Bao, H. and Thiemens, M. (2000a) Atmospheric influence of Earth's earliest sulfur cycle. *Science*, 289, 756–758.
- Farquhar, J., Johnston, D. T. and Wing, B. A. (2007a) Implications of conservation of mass effects on massdependent isotope fractionations: Influence of network structure on sulfur isotope phase space of dissimilatory sulfate reduction. *Geochimica et Cosmochimica Acta*, **71**, 5862–5875.
- Farquhar, J., Savarino, J., Jackson, T. L. and Thiemens, M.
 H. (2000b) Evidence of atmospheric sulphur in the martian regolith from sulphur isotopes in meteorites. *Nature*,

404, 50-52.

- Farquhar, J., Savarino, J., Airieau, S. and Thiemens, M. H. (2001) Observation of wavelength-sensitive mass-independent sulfur isotope effects during SO₂ photolysis: Implications for the early atmosphere. *Journal of Geophysical Research*, **106**, 32829–32839.
- Farquhar, J., Johnston, D. T., Wing, B. A., Habicht, K. S., Canfield, D. E., Airieau, S. and Thiemens, M. H. (2003) Multiple sulphur isotopic interpretations of biosynthetic pathways: implications for biological signatures in the sulphur isotope record. *Geobiology*, 1, 27–36.
- Farquhar, J., Peters, M., Johnston, D. T., Strauss, H., Masterson, A., Wiechert, U. and Kaufman, A. J. (2007b) Isotopic evidence for Mesoarchaean anoxia and changing atmospheric sulphur chemistry. *Nature*, **449**, 706–710.
- Freeman, D. E., Yoshino, K., Esmond, J. R. and Parkinson, W. H. (1984) High resolution absorption cross section measurements of SO₂ at 213 K in the wavelength region 172-240 nm. *Planetary and Space Science*, **32**, 1125– 1134.
- Fujii, T., Suzuki, D. and Yamana, H. (2008) Nuclear field shift effect of chromium(III) in repeated extraction using a crown ether. *Solvent Extraction and Ion Exchange*, 26, 100–112.
- Fujii, T., Moynier, F. and Albarede, F. (2009) The nuclear field shift effect in chemical exchange reactions. *Chemi*cal Geology, 267, 139–156.
- Gao, Y. Q. and Marcus, R. A. (2001) Strange and unconventional isotope effects in ozone formation. *Science*, 293, 259–263.
- Guo, Q. J., Strauss, H., Kaufman, A. J., Schröder, S., Gutzmer, J., Wing, B., Baker, M. A., Bekker, A., Jin, Q., Kim, S. T. and Farquhar, J. (2009) Reconstructing Earth's surface oxidation across the Archean-Proterozoic transition. *Geology*, **37**, 399–402.
- Halevy, I., Johnston, D. T. and Schrag, D. P. (2010) Explaining the structure of the Archean mass-independent sulfur isotope record. *Science*, **329**, 204–207.
- Hoashi, M., Bevacqua, D. C., Otake, T., Watanabe, Y., Hickman, A., Utsunomiya, S. and Ohmoto, H. (2009) Primary haematite formation in an oxygenated sea 3.46 billion years ago. *Nature Geoscience*, 2, 301–306.
- Hofmann, A., Bekker, A., Rouxel, O., Rumble, D. and Master, S. (2009) Multiple sulphur and iron isotope composition of detrital pyrite in Archaean sedimentary rocks: a new tool for provenance analysis. *Earth and Planetary Science Letters*, **286**, 436–445.
- Holland, H. D. (2002) Volcanic gases, black smokers, and the great oxidation event. *Geochimica et Cosmochimica Acta*, 66, 3811–3826.
- Janssen, C., Guenther, J., Mauersberger, K. and Krankowsky, D. (2001) Kinetic origin of the ozone isotope effect: a critical analysis of enrichments and rate coefficients. *Physical Chemistry Chemical Physics*, 3, 4718-

4721.

- Johnston, D. T., Farquhar, J., Wing, B. A., Kaufman, A. J., Canfield, D. E. and Habicht, K. S. (2005a) Multiple sulfur isotope fractionations in biological systems: A case study with sulfate reducers and sulfur disproportionators. *American Journal of Science*, **305**, 645–660.
- Johnston, D. T., Wing, B. A., Farquhar, J., Kaufman, A. J., Strauss, H., Lyons, T. W., Kah, L. C. and Canfield, D. E. (2005b) Active microbial sulfur disproportionation in the Mesoproterozoic. *Science*, **310**, 1477–1479.
- Kamber, B. S. and Whitehouse, M. J. (2007) Micro-scale sulphur isotope evidence for sulphur cycling in the late Archean shallow ocean. *Geobiology*, 5, 5–17.
- Kasting, J. F. (1993) Earth's Early Atmosphere. Science, 259, 920–926.
- Kasting, J. F. (2001) The rise of atmospheric oxygen. Science, 293, 819–820.
- Kato, Y., Suzuki, K., Nakamura, K., Hickman, A. H., Nedachi, M., Kusakabe, M., Bevacqua, D. C. and Ohmoto, H. (2009) Hematite formation by oxygenated groundwater more than 2.76 billion years ago. *Earth and Planetary Science Letters*, **278**, 40–49.
- Kaufman, A. J., Johnston, D. T., Farquhar, J., Masterson, A. L., Lyons, T. W., Bates, S., Anbar, A. D., Arnold, G. L., Garvin, J. and Buick, R. (2007) Late Archean biospheric oxygenation and atmospheric evolution. *Science*, **317**, 1900–1903.
- Kerrich, R. and Said, N. (2011) Extreme positive Ceanomalies in a 3.0 Ga submarine volcanic sequence, Murchison Province: oxygenated marine bottom waters. *Chemical Geology*, 280, 232–241.
- Knoll, A. H. and Carroll, S. B. (1999) Early animal evolution: emerging views from comparative biology and geology. *Science*, 284, 2129–2137.
- Kump, L. R. (2008) The rise of atmospheric oxygen. Nature, 451, 277–278.
- Lasaga, A. C., Otake, T., Watanabe, Y. and Ohmoto, H. (2008) Anomalous fractionation of sulfur isotopes during heterogeneous reactions. *Earth and Planetary Science Letters*, 268, 225–238.
- Lyons, J. R. (2007) Mass-independent fractionation of sulfur isotopes by isotope-selective photodissociation of SO₂. *Geophysical Research Letters*, 34, L22811.
- Lyons, J. R. (2009) Atmospherically-derived massindependent sulfur isotope signatures, and incorporation into sediments. *Chemical Geology*, 267, 164–174.
- Marcus, R. A. (2004) Mass-independent isotope effect in the earliest processed solids in the solar system: A possible chemical mechanism. *Journal of Chemical Physics*, **121**, 8201–8211.
- Masterson, A. L., Farquhar, J. and Wing, B. A. (2011) Sulfur mass-independent fractionation patterns in the broadband UV photolysis of sulfur dioxide: Pressure and third body effects. *Earth and Planetary Science Letters*, 306,

253-260.

- Mauersberger, K. (1981) Measurement of heavy ozone in the stratosphere. *Geophysical Research Letters*, **8**, 935–937.
- Mojzsis, S. J., Coath, C. D., Greenwood, J. P., McKeegan, K. D. and Harrison, T. M. (2003) Mass-independent isotope effects in Archean (2.5 to 3.8 Ga) sedimentary sulfides determined by ion microprobe analysis. *Geochimica et Cosmochimica Acta*, 67, 1635–1658.
- Naraoka, H. and Poulson, S. R. (2009) UV absorption spectra of oxygen isotopomers of SO₂, and implications for possible oxygen-mass independent fractionation (MIF) in the Archean. *Eos Transactions, AGU Fall Meeting Supplement*, **90(52)**, B13D-0544.
- Nishizawa, K., Satoyama, T., Miki, T. and Yamamoto, T. (1995) Strontium isotope effect in liquid-liquid extraction of strontium chloride using a crown ether. *Journal of Nuclear Science and Technology*, **32**, 1230–1235.
- Ohmoto, H. and Lasaga, A. C. (1982) Kinetics of reactions between aqueous sulfates and sulfides in hydrothermal systems. *Geochimica et Cosmochimica Acta*, 46, 1727–1745.
- Ohmoto, H., Watanabe, Y., Ikemi, H., Poulson, S. R. and Taylor, B. E. (2006a) Sulphur isotope evidence for an oxic Archean atmosphere. *Nature*, 442, 908–911.
- Ohmoto, H., Watanabe, Y., Yamaguchi, K. E., Naraoka, H., Haruna, M., Kakegawa, T., Hayashi, K. -I. and Kato, Y. (2006b) Chemical and biological evolution of early Earth: Constraints from banded iron formations. In: Evolution of Early Earth's Atmosphere, Hydrosphere, and Biosphere -Constraints from Ore Deposits (eds. Kesler, S. E. and Ohmoto, H.), Geological Society of America Memoir, 198, 291–331.
- Ono, S., Eigenbrode, J. L., Pavlov, A. A., Kharecha, P., Rumble, D. III., Kasting, J. F. and Freeman, K. H. (2003) New insights into Archean sulfur cycle from massindependent sulfur isotope records from the Hamersley Basin, Australia. *Earth and Planetary Science Letters*, 213, 15–30.
- Ono, S., Beukes, N. J., Rumble, D. III. and Fogel, M. L. (2006) Early evolution of atmospheric oxygen from multiplesulfur and carbon isotope records of the 2.9 Ga Mozaan Group of the Pangola Supergroup, Southern Africa. South African Journal of Geology, 109, 97–108.
- Ono, S., Beukes, N. J. and Rumble, D. (2009a) Origin of two distinct multiple-sulfur isotope compositions of pyrite in the 2.5 Ga Klein Naute Formation, Griqualand West Basin, South Africa. *Precambrian Research*, **169**, 48–57.
- Ono, S., Kaufman, A. J., Farquhar, J., Sumner, D. Y. and Beukes, N. J. (2009b) Lithofacies control on multiplesulfur isotope records and Neoarchean sulfur cycles. *Precambrian Research*, **169**, 58–67.
- Otake, T., Lasaga, A. C. and Ohmoto, H. (2008) Ab initio calculations for equilibrium fractionations in multiple sulfur isotope systems. *Chemical Geology*, 249, 357–376.
- Papineau, D., Mojzsis, S. J., Coath, C. D., Karhu, J. A. and

262

McKeegan, K. D. (2005) Multiple sulfur isotopes of sulfides from sediments in the aftermath of Paleoproterozoic glaciations. *Geochimica et Cosmochimica Acta*, **69**, 5033– 5060.

- Papineau, D., Mojzsis, S. J. and Schmitt, A. K. (2007) Multiple sulfur isotopes from Paleoproterozoic Huronian interglacial sediments and the rise of atmospheric oxygen. *Earth and Planetary Science Letters*, 255, 188–212.
- Partridge, M. A., Suzanne, D. G., Baublys, K. A. and Young, E. (2008) Pyrite paragnesis and multiple sulfur isotope distribution in late Archean and early Paleoproterozoic Hamersley Basin sediments. *Earth and Planetary Science Letters*, 272, 41–49.
- Pavlov, A. A. and Kasting, J. F. (2002) Mass-independent fractionation of sulfur isotopes in Archean sediments: strong evidence for an anoxic Archean atmosphere. *Astrobiology*, 2, 27–41.
- Pen, A. and Clayton, R. N. (2008) SO₂ self-shielding during UV photolysis. *Geochimica et Cosmochimica Acta*, **72**, A 734.
- Philippot, P., Van Zuilen, M., Lepot, K., Thomazo, C., Farquhar, J. and Van Kranendonk, M. J. (2007) Early Archaean microorganisms preferred elemental sulfur, not sulfate. *Science*, **317**, 1534–1537.
- Poulson, S. R., Naraoka, H. and Sugioka, M. (2008) Ultraviolet spectra of SO₂, and implications for mass-independent fractionation during photolysis [Abstract at BAR-19]. Astrobiology, 8, 903.
- Ran, H., Xie, D. and Guo, H. (2007) Theoretical studies of C¹ B₂ absorption spectra of SO₂ isotopomers. *Chemical Physics Letters*, **439**, 280–283.
- Runnegar, B. (1991) Precambrian oxygen levels estimated from the biochemistry and physiology of early eukaryotes. *Palaeogeography Palaeoclimatology Palaeoecology*, 97, 97–111.
- Schauble, E. A. (2007) Role of nuclear volume in driving equilibrium stable isotope fractionation of mercury, thallium, and other very heavy elements. *Geochimica et Cosmochimica Acta*, **71**, 2170–2189.
- Sessions, A. L., Doughty, D. M., Welander, P. V., Summons, R. E. and Newman, D. K. (2009) The continuing puzzle of the Great Oxidation Event. *Current biology*, **19**, R567–

R574.

- Shen, Y., Farquhar, J., Masterson, A., Kaufman, A. J. and Buick, R. (2009) Evaluating the role of microbial sulfate reduction in the early Archean using quadruple isotope systematics. *Earth and Planetary Science Letters*, **279**, 383–391.
- Thiemens, M. and Heidenreich, J. E. III. (1983) The massindependent fractionation of oxygen: A novel isotope effect and its possible cosmochemical implications. *Science*, 219, 1073–1075.
- Thiemens, M. H. (2006) History and applications of massindependent isotope effects. Annual Review of Earth and Planetary Sciences, 34, 217–262.
- Thomazo, C., Ader, M., Farquhar, J. and Philippot, P. (2009) Methanotrophs regulated atmospheric sulfur isotope anomalies during the Mesoarchean (Tumbiana Formation, Western Australia). *Earth and Planetary Science Letters*, 279, 65–75.
- Ueno, Y., Ono, S., Rumble, D. and Maruyama, S. (2008) Quadruple sulfur isotope analysis of ca. 3.5 Ga Dresser Formation: New evidence for microbial sulfate reduction in the early Archean. *Geochimica et Cosmochimica Acta*, 72, 5675–5691.
- Ueno, Y., Johnson, M. S., Danielache, S. O., Eskebjerg, C., Pandey, A. and Yoshida, N. (2009) Geological sulfur isotopes indicate elevated OCS in the Archean atmosphere, solving faint young sun paradox. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, **106**, 14784–14789.
- Watanabe, Y., Farquhar, J. and Ohmoto, H. (2009) Anomalous fractionations of sulfur isotopes during thermochemical sulfate reduction. *Science*, **324**, 370–373.
- Wu, C. Y. R., Yang, B. W., Chen, F. Z., Judge, D. L., Caldwell, J. and Trafton, L. M. (2000) Measurements of high-, room-, and low-temperature photoabsorption cross sections of SO₂ in the 2080- to 2950-Å region, with application to Io. *Icarus*, **145**, 289–296.
- Young, E. D., Galy, A. and Nagahara, H. (2002) Kinetic and equilibrim mass-dependent isotope fractionation laws in nature and their geochemical and cosmochemical significance. *Geochimica et Cosmochimica Acta*, **66**, 1095–1104.

Appendix: Bigeleisen and Mayer (1947) による質量依存則の導出

化合物Aと化合物Bの同位体交換反応が平衡に達 しているときの同位体分別係数 (α_{A-B}) は,

$$\alpha_{\rm A-B} = \beta_{\rm A} / \beta_{\rm B} \tag{A-1}$$

 β_{A} , β_{B} は, 化合物 A および B の換算分配関数比で ここで, さらに U が十分に小さな値である時, (A-あり,

$$\beta = \prod_{j=1}^{f} \frac{U_{j}'}{U_{j}} \frac{e^{-U_{j}/2}}{e^{-U_{j}/2}} \frac{(1-e^{-U_{j}})}{(1-e^{-U_{j}'})}$$
(A-2)

where
$$U_j = hv_j / kT$$
 (A-3)

によって得られる値である。U'は異なる(重い)同 位体のU値, f は各分子における分子内振動の自由 度であり, βはそれぞれの振動モードについての総積 である。また, h はプランク定数, k はボルツマン定 数, T は温度(K), v_iはj 番目の振動モードの調和振 動数 (s⁻¹) である。

各々の振動モードについて、 $\Delta U = U - U'$ とする と.

$$\beta_{j} = \frac{U'}{U' + \Delta U} e^{\Delta U/2} \frac{(1 - e^{-(U' + \Delta U)})}{(1 - e^{-U'})}$$
(A-4)

となる。△U は水素以外では十分に小さい値である ので、それぞれの項についてテイラー展開を行うと、

$$\boldsymbol{\beta}_{j\cong} \left(1 - \frac{\Delta U}{U'}\right) \left(1 + \frac{1}{2}\Delta U\right) \left(1 + \frac{\Delta U e^{-U'}}{1 - e^{-U'}}\right) \tag{A-5}$$

これをさらに展開し ΔU^2 以上の項を無視すると、

$$\beta_{j} = 1 + \left(\frac{1}{2} - \frac{1}{U'} + \frac{1}{e^{U'} - 1}\right) \Delta U \tag{A-6}$$

が得られる (Bigeleisen and Mayer, 1947の11 a 式に 相当)。

$$U' \equiv \gamma U$$
 (i.e., $\Delta U \equiv U(1 - \gamma)$) とすると,

$$\beta_{j} = 1 + \left(\frac{1}{2} - \frac{1}{\gamma} \frac{1}{U} + \frac{1}{e^{\gamma U} - 1}\right) U(1 - \gamma)$$
 (A-7)

$$\beta_{j} = (2 - \frac{1}{\gamma}) + \frac{1}{2}(1 - \gamma)U + \frac{1 - \gamma}{e^{\gamma U} - 1}U$$
 (A-8)

8) 式の第3項をさらにテイラー展開することができ る:

$$\begin{split} \frac{1-\gamma}{e^{\gamma U}-1} U &\cong \frac{(1-\gamma)U}{\gamma U} \\ & \left[1-(\frac{1}{2}\gamma U+\frac{1}{6}\gamma^{2}U^{2})+(\frac{1}{2}\gamma U+\frac{1}{6}\gamma^{2}U^{2})^{2}\right] \\ & \cong (\frac{1}{\gamma}-1)\left(1-\frac{1}{2}\gamma U+\frac{1}{12}\gamma^{2}U^{2}\right) \\ & (U^{3}以上の頃は無視) \end{split}$$
(A-9)

(A-8) 式および (A-9) 式より,

$$\beta_{j} = \cong (2 - \frac{1}{\gamma}) + \frac{1}{2}(1 - \gamma) U$$

+ $\frac{1}{\gamma} - 1 - \frac{1}{2}(1 - \gamma) U + \frac{1}{12}(1 - \gamma) \gamma U^{2}$
= $1 + \frac{1}{12}(1 - \gamma) \gamma U^{2} = 1 + \frac{\Delta UU'}{12}$
 $\cong 1 + \frac{\Delta (U^{2})}{24} = 1 + \frac{1}{24}(\frac{h}{kT})^{2} \Delta (v^{2})$ (A-10)

 $\Delta(v^2) = \frac{m' - m}{mm'} C$ (Cは定数)の関係式と (A-1)式 mmより.

$$\alpha_{A-B} = \frac{1 + \frac{(m' - m)}{mm'}C_{A}}{1 + \frac{(m' - m)}{mm'}C_{B}} \cong 1 + \frac{m' - m}{mm'} (C_{A} - C_{\underline{B}})$$
(A-11)

が得られる。